■プログラムコーディネータ／GAセンター長交代にあたって

グリーンアジア国際戦略プログラム
プログラムコーディネーター・教授
谷本　潤

2012年度に始まった本プログラムは本年度が中間評価となった。折り返し点である。転瞬のうちの4年間であった。発足前から、申請案のアイデア練り込みと細部デザイン、案文のレトリックを巡って呻吟し、更には開始直後のカオス状態をどう乗り切るか、プログラムを如何にして正則軌道に乗せるかをともに試行錯誤してきた原田明教授から、プログラムコーディネータおよびセンター長の責を引き継いだ。原田先生とは、本プログラムの運用と軌一して総理工学府研究院（本プログラムの実質的責任部局）の執行部業務もともにしてきた同志である。今次、先生は総理工研究院長・学府長の重責を担われることになり、くだんの衣鉢を私が継ぐことになったわけだ。と云って、仕事のスタイルは大きくは変わらない。原田先生は、蓋し、GAを我がことと思う点以前と変わりなく、その点同じくする私もまた然りと云うところだから、実質二人で運営していること、以前と亦同様である。よって、頭句にある、交代に当たって、改めて表明すべき所信があるわけではない。

GAの理念は、環境問題が顕在化する露頭として勃興するアジア圏を時空間に広い適用フィールドと観、この解決に寄与する次世代の知的エリートを育成するものである。そのためには、裾野の広い環境問題の本義に戻って、視野狭窄に陥りがちな従来の博士教育プロセスとは一線を画し、自らの専門智のみならず周辺分野にも深い洞察力を有し、何より知的エリートとしてのインフラとなる人文社会学にも深く広く通暁したスーパー理系人を育成し、文理融合に非ずして、「理文融合」を体現してやろうとの斬新な試みなのである。黙してコツコツと自分の技術を極めるをよしとする従来の日本的技術者像・科学者像を打破し、大向こうを相手に自らを語り得る、内実の重さに加えて口舌も滑らかな人材を育成しようと云うのである。今日的要請からして、当然、「英語で」ということになる。いわずもがなであるが、これ決して、口舌の徒、いわゆる三百代言屋や千三つ屋を養成せんとしているのはない。十の中身有って、世界に向かってきちんと十を発信できる日本の知性を育てるのである。この根本哲学には、現下の我が日本の繁栄を向後も維持発展させて行くには、科学技術立国としてしか他方途なきを知るが故の危機感が背景にある。

ときにつかぬ事を言うが、昨今「助長」という語の誤用が目立つようだ。原意は『孟子』公孫丑上の故事にある、不必要な力添えをして却って事を害するさまを言うのだが、最近は成長や発展を助ける意味に転じている。教育はあくまで彼彼女らの自助を扶けるものであって、教師が高見に立って引き上げてやるなどと言った夜郎自大の発想に依拠するものではない。それこそ助長である。そのためには吾ら教授陣の知的な構えもつねに問われていると思わねばならない。これ自戒を込めて。

いずれにしろ、路はまだ半ばである。何とか理想に近づけたいと思うている。

バンコクのDowntown風景